

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

恋姫 無双 ～ Fate of The beginning ～

【作者名】

userjpcafe

【あらすじ】

平凡な高校生が織り成す非凡な転生劇！ここに開幕ッ！！

オリ主転生モノ。亀更新ついでに誤字脱字。作者受験生のくせに何やってんだよおおお!!と思う今日この頃。やっぱり息抜きは大切だと思っぞこら。

「この言葉、意味違うんじゃない？」とか「この言葉の使い方間違ってるね？」とか変な違和感があったりしたら教えてくださいな。だって俺外人だもん！

1わ

朝起きて、身支度をした俺は朝食を済ませる。

そこでお母さんとお父さんとで何気ない世間話をし、お父さんが仕事に出かける。

それを見送った後で自分の部屋に行き、持ち物を見て忘れ物が無いか確認する。

時間があるのでお気に入りの本を読み、時間を潰す。

時計を見ればちょうどいい時間。

お母さんから昼の弁当を貰い、玄関を出る。

家の扉をしめ、友達が待っているだろう所へと駆け出す。

何気ない日常。

変わらない日常。

これからも、続くであろう平和な時。

普通の高校生として過ごし、普通に授業を受け、普通にご飯を食べ、普通にスポーツをし、普通に友達と遊び、普通に恋をし、普通に家に帰り、普通に家族とご飯を食べ、普通に寝る。

そんな普通づくめの毎日。

そんな日々が突如、崩れ去る。

「・・・なんだ・・・？」

いつもと違う。

ハッキリと分らないが、なんとなくそう思う。

今は友達と待ち合わせをしている。人を待たせるのはなんか嫌なので走っている。

のだが・・・。

嫌な寒気がする。

走っているこの地面も、肩に背負っている愛用の鞆も、進むたびに変わる建物も、過ぎていく人も。

すべてが異様に感じる。

思わず立ち止まる。

汗が止まらない。嫌な汗だ。

しかも何故息が上がっている・・・？

俺は中学の頃陸上に所属していて、そして高校に入ってから時々走ったりしているので体力には自信がある。

この前、学校で計った持久走では学年順位4位という科学部に似合わない成果を上げたのだ。

だからこの程度の距離で息が上がるわけがない。

家から200mも離れていないのに。

全速力なら、まあ流石に疲労はするだろうが体力を温存する程度の軽い走り。

・・・これは自身の体力が落ちたかも。

そう思うもそれはすぐに間違いだと気づく。

視界が狭まっている・・・？

熱中症・・・？いや冬にそれが起きるのは少なすぎるだろ。

体力不足・・・？それにしても体力落ちるの早いなあ。2日前まで300mのグラウンドのトラックを15周という部全員で受ける刑罰を1位で通過した俺だぞ。

ここまでグラウンド1周に満たない距離だぞ。

・・・じゃあなんだ？もしや風邪!?

いやないない。17年風邪になった事ない、健康児がそんないきなり・・・いきなり・・・ならない、よな？

と、取り敢えずなんだ!!

そんな事を考えてるうちに、目の前に地面が迫っている事も知らず。

(あ……?)

一瞬地面がなくなったかのような浮遊感のあと、顔に重く鈍い衝撃が。

「ここでやっと、自分は倒れたのか」と気づく。

声を出そうにも、喉からつめき声が出てくるばかりで自分でも何を喋っているのかわからない。

徐々に薄れていく意識を繋ぎとめるのに必死なのだ。

そんな自分に気付き、駆け寄ってくる人もいる。

だがそれすらも思考にノイズがかかったかのような錯覚に陥る程意識は消えかかっている今の状態では、気にかける余裕は全くない。

俺は過去の映像が高速でフラッシュバックしていくのを視界がだんだんと白んでいく感覚とともに感じていた。

(こ、れ……が、走馬灯って……やつ、か)

そして一瞬だけハッキリした視界の中で女の人の顔が見える。

あの人は……?

意識が消える数瞬前に浮かんだ疑問は、ブツっという何かが切れたかのような音とともに沈んでいった。

2わ

俺は今のこの状況について一言。

「何が起きたんだアアアアアアッ!!!!」

だがそれも所詮、心の中でのつぶやき。意味のないことである。

変な息苦しさや疲労感を感じ、倒れ、意識が朦朧とし、走馬灯が流れ、見事にブツン切りされたパソコンのように動かなくなった俺だ
が。

今なぜかここにいる。ここにいて、俺が！

でも不可解なことがある。

あえて良い感じにフリーズをつけてみるならば、「赤ちゃんに逆戻りっ!? タイムスリップしちゃったよ テヘッ」か……。

……いやいや、タイムスリップじゃないだろ……てか、テヘッってなんだよ。

見事に他の人から見れば可哀想な人認定されるノリツッコミを披露した俺。

だが実際に起きたことなので、可哀想な人認定する他の人もいなければ自分で自分に可哀想な人認定しなければ気が収まらないという可哀想な事態である。

そう、俺は赤ちゃんになっていたのだ。

っペー、マジどうしよう、っペー……

首もこりんこりんって良い感じに回るのだが、ずっと回してるといつか首がゴリッゴリッと鳴ってはいけない部類に入る音を発してしまつので自重。

そして言いたかった事が一つ。

「ばぶばあつ、ぶああつあー（見た目は子供っ、頭脳は大人!）」

……迫力ねえ……。

それに子供つつか、赤ちゃんじゃん。見た目は幼児って……どこのアニメだよ。

ということでしょうか。

まじどうしよう。

まっじい、どーしょあーっ！

やばい、テンションがダメな感じにアガってる。

落ち着け俺っ。それもこれも全部「赤ちゃん」という力が作り出した幻想にすぎない！というか幻想だ！幻だ！幻影だ！

……ちよつとした現実逃避を脳内で繰り広げてからまじめに現実を直視する。

情報を整理。

今、俺はゆりかごらしきものについてブランブラン揺れている。これがかたかなに愉快なので自ら赤ちゃんなりに頑張っつて揺らしているが。

そして状態は赤ちゃん。自分の手を見たときは驚いたものだ、「ぶえあー、ああい（俺の手え、かわいっ！）」と叫んで（？）自分の声に驚愕したのを覚えている。

これらはどうしようもない。だつて赤ちゃんですもの。

部屋らしきトコロにいるのはわかる。だけど現代かは怪しい。

機械がない！電気がない！時計がない！ああああ!!!、と最先端の現代っ子のように泣き喚くことはないがやはり現代の日本育ちだと身の回りにそういうのがあることが多いのでちよいと慣れない。

……まあ、今こんな感じが。

それにしてもなんでこうなつたんだらうか。

普通かつ平凡な高校生こと俺が、赤ちゃんに。

……つてか俺つて死んだの!?

なんか走馬灯も流れた感じがするし。

あれつて、ほんとに写真のコマ撮りみたいなあのパシヤツパシヤツつて感じに映り変わるんだね。……いや、関係ないか。

取り敢えずそんなのも経験したんだし、死因は知らんけども……まあ死んじやつたつて事で。

そうでもしなければこの状況についてなにも説明出来んでしょうが！

というワケで……どうしよう。

もついいや、やけくそだやけくそーばぶばぶ言ってるよこのやろっ！

「ばぶあゝ、ぶあぶびうゝゝばゝゝゝ（ああゝゝ、暇すぎるゝゝわゝゝ）

」

「あらあら

」ばぶっ!?!(なにやっ!?!)」

一人で昔に思いを馳せながら舌足らずどころか顎足らずの口で一生懸命歌っていたトコロにいきなり声をかけられたので驚いた。

というか、いつ来た。つか、人いたんかい。ってか誰よこの人。

そう思い、声をかけられた方向に顔をグリンッと向けると、そこには……。

「まあ、可愛いわねゝゝゝ」

美人がいた。とびきり美人がいた。

燃え盛るかのような赤い髪を肩まで伸ばし、空色の瞳をこちらに向けその整った顔を歓喜に変えている。

いわゆる、絶世の美女である。

女にそこまで興味の無かった(ホモじゃねえ)あの俺が呆けてしまっほごに。

「あらゝなにも言わなくなったわよ、あなた？」

「……驚いているだけではないのか？」

……俺この人に育てられるんだねゝ。

「ばぶばー(やったー!?)」

そんな感じで喜びを必死に体现していると、ふと腹に手が添えられた。

なんじゃい、と思う暇もなく離陸した。

「ほゝら、母さんだよゝ」

取り敢えず抱えられているのがわかった。

でも、この圧倒的質量を誇りなおかつ程よい弾力が数々の男を魅了

するであろうモノが俺のすぐ横にある。というか目の前だ。

でかっ!?何食ったらこんなにかくなんの!?……まったくけしからんっ!

抱きかかえられながら、赤ちゃんが理性を保とうと手で顔をおおい隠すという構図はあまりにもおかしくないか?

まず赤ちゃんに理性うんぬんは早すぎだろ。

……だがご心配なく。私は見た目は幼児、中身は17歳恋に悩める平凡高校生!

決まっただぜ。

3わ

「うむうむ、あんな事もあったなあ」

「「うらあ！ボケつとすんなあっ！」」

「あいさー」

あの赤ちゃんになっちゃった事件から8年の月日が流れた。

わかったこともあった。俺は転生というヤツで赤ちゃんに戻ったらしい。うん、"らしい"とのことだから推測でしかないことだが。

そしてここは中国。しかも古代のだ。更に三国志時代、のちよっと前ぐらい。

……ということは俺、戦争出るんじゃない？

みたいに思っただけ危機感を覚え、親に相談。「母さん、俺強くなりたーい」「あら、いいわよ」。そんな簡単に決めていいのか我が母よ。まあ親だから子供が危機に瀕したときに対処できる力を持たせようという魂胆だろっけど。

そんなこんなで、中国だから中国語で話してみよーと「ニーハオ」って何回も言ったら、すごく優しい目を向けてきたりといういろいろな事があつた。

体も成長してきた。やっぱり人間成長するものだね。

赤ちゃんの頃は誘惑に耐えず首をごろんごろんこやっては、ゴキッと鳴らして親がびっくりしていたり。

お母様の超重量大迫力のポインを目の当たりにして鼻血がちょろっと出たり。

いろいろと迷惑をかけてしまった感がある。申し訳ない……不甲斐ない息子で。

あ、そういえば名前を決めてもらった。

性は頂(コウ)、名は征(セイ) 字は斬華(ザンカ)。真名は煌龍(コウ)

ウリ)。

中々にイケてんじゃね、名前？龍とかカッターわあ、と貰ったときに思った。やっぱり良い名前っていいよね。

そして名付け親である二人のご紹介。

まずあの超兵器を標準装備している母こと、性は項、名は英(エイ)字は織凧(シキカ)。真名は奏(ソウ)

真紅の髪は腰辺りまで無造作に伸ばされており、だがそのグラマラスな肢体と鋭い目つきが合わさって不思議と似合うという美人な人だ。

そして寡黙な父こと、性は項、名は采(サイ)、字は呈北(テイホク)。真名は秋駆(シユウカ)

青い髪をオールバックにした感じ。体格は良く、太刀を使うので筋肉が凄い。結構無口。という感じである。

二人共腕っ節のほうはかなり強く、巷で「双太刀」と称される程だ。うむ、そんな人を親に出来て本当に嬉しいぜまったく。

ちなみに今、何をしているかというところと家の庭で母さんに太刀の使い方を見せてもらっているところだ。

「休憩！もう休みましょう」
「はい」

そう言っただけ母さんは木陰に立って様子を見ていたお父さんのところへ行く。

僕はそれについて行き、木陰に座る。

お母さんとお父さんがイチヤイチャ(お母さんが一方的に攻めているが)し始めたところで、俺はいわゆる座禅を組み意識を奥深くまで沈める。

そして先ほどの母さんとの練習を思い描く。
いつの間にか手に握っていた太刀を構える。

ほどなくして目の前に現れる太刀を構えた母さん。
全身の力を緩め、かつ神経全てを母さんに集中させ研ぎ澄ませる。
母さんの一挙手一投足。それを見極め、そこからどの動きをするかを脳内で予測する。

ふと、母さんが重心をずらした。

俺は好機と見て、腰をひねり右足を踏み込んで太刀を横に振る。
今日の前にいる母さんは本物ではないので、殺す気で太刀を振る。
体のねじりが上乘せされたこの斬撃はいかに母さんとはいえ、捌くのは難しい。それどころか避けてしまえば確実に怯む。

それほどまでに強い一撃。

だが。

「(っ!?)」

地面スレスレという具合にまで体を沈めた母さんには当たらない。
母さんがちょっと顔を上げただけで当たるぐらいのトコロを刃が通る。

俺はその予想外の動きに一瞬戸惑いながらも、気を取り直し母さんの攻撃を対処する。

母さんは沈みこませた体を急浮上させる。その力も利用して、下から太刀をすくい上げる。

俺はそれを半身になって避ける。

そこから振り下ろすかと太刀を構えたかと思いきや、こちらに背を向け一回転して横に凪いできた。

これには流石に予想外で、振り下ろされることを予想して上に構えていた太刀を引き戻し、脇を締めてなんとか苦し紛れに横から来た刃に当てる。

直撃は免れたものの、不安定な姿勢で遠心力の加わった一撃を受けたので衝撃で腕がしびれる。

「っぐー」

母さんは既に次の攻撃を俺に叩き込もうと動き出している。

「くそっ」

腕はしびれており、太刀を持つだけでも精一杯だ。

ここは回避に専念する。

そこで五感を母さんとその周囲に集中する。

相手の呼吸、心拍、筋肉の収縮、目の動き、風向き、地面の質、全てのありとあらゆる情報が頭に流れ込んでくる。

それらを脳内で計算・処理をし、相手の動きを予測から予知に近いレベルにまで引き上げるのだ。

無論、それに必要な情報量は半端じゃない。0・1秒先を読み取るうとするのにもその情報量で頭痛がするのだ。

だがその痛みも勝つことに比べればどうということはない。

母さんの呼吸が一瞬止まり右足が僅かに前に動く、そして右手が動き始める。

この動きは上から下へと振り下ろす動作だ。右手の小指の向いている方向に太刀は振り下ろされる。

だが避けるタイミングも重要だ。早く避けても、母さんならばそれを修正してくるかもしれない。いや、する。

だからギリギリで避ける。

俺は足運びに注意しつつ、太刀が振り下ろされる速度に合わせ横に跳ぶ。

そして俺が居たところに太刀が振り下ろされる。つまり俺は避けるのに成功したのだ。

俺は思考加速を止めて、しびれが比較的引いた左腕で太刀の柄を握りなおす。

遅々として進んでいた時間が急に戻る。その感覚には慣れているのでそれについてスルー。

振り下ろしている態勢の母さんに袈裟懸けで太刀を振るう。

避けられるか？と思うも、母さんはその振り下ろしに相当力を込めていたのか、その反動で動けなくなっている。

その心配も杞憂かと思ひ、太刀を振った。

一瞬の抵抗のあと、刃が空を切る。

母さんは陽炎のように揺らめき、フツと消える。

……やはり、母を斬るのは毎回の事ながら嫌になるな。

と思っていると、立っていらなくなってへたりこんでしまう。
心の中でも疲れて立っていられなくなるとか……しかもたった2
回太刀をふっただけでだ。まあ思考加速のせいでもあるが。

そういえば、説明をしていなかったな。

ここは俺の精神の世界。自分が記憶したモノをいくらでも再現で
きる形なき無限の世界。

だがここにいれるのは少しの時間。でもなんでも出来るのっで練
習にうってつけである。

先ほどの母さんは幻。そう、その幻で大軍を作って戦わせるなんて
ことも出来るのだろうが……その幻は自分の精神力から作られる。

この歳（まあ精神年齢でも20超えてるがまだまだ若い）では一人
が限界だ。

そして先ほどの母さんの動きは俺の記憶から読み取られたものだ。
なかなか便利なこの精神世界。

これのデメリットはこの精神世界での1時間が現実世界での2時
間という感じに、時間の流れが違う。

まあ、メリットはいろいろあるのでそのデメリットはスルーでき
る。

あ、あとこの世界で休んでも逆に疲れる、という設計。

だからここに入って寝るといふ選択肢は取れないのである。とい
うか寝たらその間にも精神力は減っていつて生命維持に必要な精神
力が無くなつてご臨終という、雪山の遭難レベルの危険度がこの世界
には孕んでいるのである。

ということできっそく戻ろう。

この世界は己の中にあるため、意識を奥に沈みこませるって感覚で
やれば行ける。すいませんね、俺は感覚で物事を覚える感覚派なんで
すよ。

そこで座禅を組み、意識を浮上させる感覚でやる。

目を開ければいつもの景色が広がる。

木の下でイチヤイチャしていた項夫妻は今家の中にいるだろう。
俺が精神世界にいることを察したらしい。うん、俺が精神世界に
行つてすることは戦つか修行だけだしな！

取り敢えず修行は終わった事を伝えるに行こうではないか。

項征 斬華。今中国大陆で頑張ってます。

4わ

頂ちゃんこと、頂征は13歳になりました！

ふっふっふ、俺のいる村では15歳になると成人認定。

つまりっ、あと2年で世界を旅できるのであります！

親元を離れ、世界各地を放浪して有名人になる！これこそ王道！T

HE・キンググロード！

家の前の庭で木陰に座り空を見上げる俺。

「でもやっぱり旅のお供が欲しいよなー」

「どうした？」

俺がそうぼやいてると、それに反応する声があがった。

後ろを見れば、一人の男が腕を組みながら木に寄りかかっていた。

「ん？いんや、別に。ただ裁がおばさんに襲われたらどうなるか考えてた」

「……お前まだ去年のアレを覚えているのか。取り敢えずそんな変な事を考えるんじゃない」

俺が裁と呼んだのは、性が豊（ホウ）、名が江（コウ）、字が土尾（シビ）。真名が裁（サイ）だ。

そこらへんにいる地味な人をちよっとだけ格好良くしてみましたという印象がピッタリ似合う、真面目君だ。

そして話にあった、おばさんに襲われたという事について教えよう。

実はコイツ、おばさんにモテるのである。この地味な印象がおばさん方に興味を持たれ、そしてよく見れば結構かっこいいじゃない？という流れでモテるのである。

そして襲われたというのは勿論武力のほうではなく、性的なウツフーンのやつだ。いや、見方を変えれば、まあ相手を屈服させるという意味では武力は使う場合もあるが、大体性的なウツフーンである。

話を戻そう。

裁がぶらぶらとのんきに散歩していた頃、おばさんに声を掛けられた。

そして色々な事があって、裁はそのおばさんの家に行き、襲われたとぞ。

「ちよつと待て！話を捏造するな！」

「へ？もしや君はエスパ」途中から声に出た！」「……………」

「俺は声を掛けられて、お茶しませんかと言われたからそのご厚意を無碍にするのは勿体ないので家にお邪魔しただけ…………」って話を聞け！あと鼻をほじるな！」

「あー、長つたらしい。そりゃあ鼻もほじりたくなる。というか言い訳は見苦しいぞ」

「言い訳じゃない！本当の事だ！」

「あーはいはい。そうですね」

「ちゃんと真面目に聞けえ！」

ぎゃーぎゃーやかましい奴である。

でもまあ、裁といればアイツの方から思ったとおりの反応が返ってくるからおもしろい。うむ、こいつを旅のお供にしてもいいな。

裁との出会いは5年前。俺が8歳の頃である。

俺はその時村のはずれにある森で修行をしていた。すると茂みから子供が出てきたのだ。

俺は盗賊かと思いい瞬身構えるも、それが子供だと知った瞬間安堵し構えを解いた。

でも一応警戒は怠らないようにしておこうと、警戒しながら子供に接近。

やせ細っていて、体中傷だらけだった。そして話掛けようとした瞬間、その子が倒れた。

俺はそれを見たとき、男の子が死ぬと直感的に感じた。

俺はこの子にあまり負担を与えないように担ぎ上げる

この子は何日も何も食べてないだろう。じゃなきゃこの軽さは実現できない。

そして村に向かって走る。

幸い、そこまで距離はないのですぐ着くだろう。村のお医者さんみたいな人に預ければなんとかなる。

何分かして村に到着し、医者みたいな人に預けて一安心。

それから2週間ぐらい経って、意識が戻ったその子から名前を教えてもらって、色々なことがあって今に至るというわけだ。

なぜあそこにいたかという盗賊から逃げてきたらしい。

うむ、中々に大変な経験をしたのお裁よ。

「まあ……それについては感謝する」

「……やっぱりお前エス」途中から声に出ていた「……そうすか」
こいつ……侮れん。

というか待てよ？古代中国なのになんでエスパーって知ってんだ？

……まあエスパーだから超能力でなんか分かるんだろ。俺には知ったこっちゃない。

そつえば俺、必殺技考えた！

「光速回転」というやつだ！ふふふ、名前がダサいなんて思うヤツはまだまだだな。

ずばり、こいつは頭を「光速回転」させるってやつだ！要は思考を加速するのだ。

どこの加速ワールドだよという人もいるだろうが、それについては俺もノーコメント。パクリじゃない、参考にしただけだっ！

意味不明などこの誰に言っているのか分からない弁明は取り敢えず置いて。

この「光速回転」は、効果で言えば己の五感で周囲の情報を傍受し、それを脳内で計算・処理し、相手の行動を予測するというもの。

そしてその間は自分の思考は加速されていて、見えるものが全部ゆっくりになる。

現代だと、映画にあった気もするが例えれば「撃たれた銃弾をサングラスの人がイナバウアーで華麗に避ける、とある映画のシーン」と考えればなんとなくわかるのではないか？

感覚派の俺は説明が嫌いなので簡単に言うが、後の先がとれるようになる。そしてもつと簡単言えば、カウンターがとりやすくなる。

これは結構良い技じゃね？とか思ってたりするるので必殺技にした。だって周りがゆっくりになるんだぜ？まあ俺もゆっくりになるけど！

でもやっぱ……地味だよなあ。

しかもこれ頭痛いし。情報量が半端なさ過ぎて頭がそれを処理しきれなくなってしまう可能性もある。

これを限界まで使ってみようとしたら5秒先を見ようとして気絶したのだ。

使いすぎは禁物。ダメ、ぜったい。

でも勝負どころに使えば効果的なので、憎もつにも憎めないイヤラシイ技である。

現にこれが無ければ母さんに勝てないのだから相当イヤラシイ。

くそー、なんかそれが無いと負けるとか悔しい！

修行して、この技無し母さんに勝ってやるー！見てろー！

俺がそう決意しているなか、裁はといつと『おばさんに襲われた件』について事情を説明していた。

裁も苦労してるねえ。

5わ

ついに、15歳！念願の15歳！

「いやっほおっし！」

「はしゃぐな」

裁はそう言うが俺には関係ない。だって嬉しいんだもんよ！

やべー、この喜びどう表現しよー。

「うっ、なんていうか……」うっ、喜びがっ！内側から溢れ出して来て、俺の中で喜びがハーモニーを奏でながらやっってくるっ！

まじ、どうしよ」「おっし……」。

「なんだよ、俺は喜びを押しさえつけようと必死になってんの」

「だからって大声出すな！そしてその態勢はなんだ！」

地面に伏せて海老反り。うむ、実に見事なエビッ「やめろ！その態勢やめろ……」。

「俺は喜びを体現してるんだ、気にするな」

「だからってそんな態勢になるわけないだろ、やめ……うなるな！」
ていうかマジ嬉しいわ。

「え？旅？」

「そうですね、母さん」

今俺は朝ご飯のお片付けをしているお母さんに質問。本邦初公開じゃないか、俺とお母さんが会話しているのは！

そして敬語なのはアレだ、本能というかそんな感じのだ。

「うっん……旅、ねえ……。ちょっと待ってなさい、秋駆さんと相談するわ」

「はっし」

そしてお父さんのトコロへ行くお母さん。

歩きたび揺れるあの魅惑の果実が……ってダメだ！第2のお母さんとは言え、欲情するのはダメだろ！

……でもよお、しょうがないんですよこれが。男の、うっ……なんて

「いつか…その…アレだ、本能。だからしょうがない。」

男なら、揺れているのを、すぐに見る。それは男の本能。しかも自動で実行されるので厄介。もしそんなプログラムあったら早急に削除したい。

だから見てしまうのはしょうがない。俺カンケーねーもん。

って俺は誰に言い訳している！

そんな感じに心の中で言い訳していると、母さんが戻ってきた。さて何を言われるのか。

「いいわよ、行ってらっしゃい」

と笑顔で言う母さん。

俺は一瞬呆ける。

子供が旅に出るっていつの間にアッサリしてるなあ……
と、いつか普通に「行ってらっしゃい」

「覚悟はあるか？」

「はい」

母さんは俺に射抜くような視線を投げる。

俺も負けじと母さんの目をまっすぐ見る。

「……わかった。行ってきなさい」

「はい、母さんー」

っていつ決意と、いつか覚悟を見る的なアレがあるだろ?!
それがなんで

「いいわよ、行ってらっしゃい」

ってあっけらかんにしかも笑顔で言うんだ！

俺が心配じゃないのか！息子を送り出すのにためらうとか無いのか！心がないな！

「だって昔から決めてたんですもの」

なっ、母さんエスパーなの!?!と聞きたいところだが生憎そんな事言える程俺は反抗期じゃない。

どっせ途中から声に出てんだろ。くそっ……言ってる悲しいぜ、全く。

「私達の時家は抜け出してでもしなきゃ旅に出られなかったのよ？」

嫌じゃないそんなの。大切に育てた子が家を抜け出すのって
ふむふむ。

「だから秋駆さんと、貴方が産まれる前から、この子が産まれて、大き
くなって旅に出たいって言ったら応援してあげて快く送り出してあ
げよう」って決めてたのよ」

……おお、なんと心温まるストーリー。

「ごめんよ、心がないとか言っつて。

「……分かりました。一応旅に出るのは5日後でいいですか？」

予定を一応言っておく。その間の五日間は村の人達とのお別れタ
イムである。結構お世話になった人もいるしな！

「ええ、あと最終日には宴が開くわ。これには必ず出なさい。」

「はい」

宴か……。俺の為に開かれるのはちょっと気が引けるが、村人達が
わざわざ開いてくれるのだ。断ったら申し訳ない。

「じゃあ話は終わり。つまりそついう事だから、貴方は心おきなく旅
に出なさい」

じゃあ私はちょっと外に出るわ、と言って家を出るお母さん。

俺はその後ろ姿を見送ってから、俺も外に出て裁のところ行くか
………と思い、歩く。

裁には何て言おうかと頭の隅で考えながら。

頂ちゃん頂ちゃん、ちゃんちゃかちゃん

「何を歌っているんだ？」

「自分の名前で歌作って遊んでた」

「遊ぶなっ！親が一生懸命考えた名前だぞ！？それを変な歌にするな」

「はあ！？変なっって言つな！天才的って言え！」

「誰が言つか！」

今俺は裁の家に行こうとしている。まあ裁の家といつても長老さんのところで居候として居るが。

一応旅に出ることを伝える。その上で旅について来ないか？と聞くのだ。

裁も15歳になった。成人と呼ばれるぐらいには育ったので、まあ心配ないだろう。

アイツとの付き合いも長い。だから信頼はできる。

やっぱり旅に信頼が出来るお供がいるのは心強いよな！

というワケでテクテク歩いてると、着いた。

村は集落が集まった感じなので結構小さい。家が建っていて、その周りには畑やらなにやらという感じ。

そして長老の家は真ん中にあるのでわかり易い。

長老の家は他の家よりかは大きいが、やっぱり現代社会に育てられた俺からすればやはり小さい。現代と古代を比べるっていうのもおかしな話だが。

扉をコンコンと叩き一言。

「おい」

ちなみにこれは声が聞こえて1分以内で来なかったら扉をブチ破るというメッセージでもある。前にそんな事を言ったらマジで1分以内に来るようになった。勿論遅くなったら扉をブチ破るが。

そして案の定1分以内で来る。

「なんだ?」

裁が扉を開けて息をきらしながらも聞いてくる。

「今日は18秒だね」

「……毎度思うが秒とはなんだ?」

裁が不思議そうに俺に聞いてくる。

あっ、もしかしてこの時代、秒とかそういう単位って無かったんだっけ。

知らずに使いまくってた。

「気にしない気にしない。取り敢えず話があるんだが」

「じゃあ上がっていけ」

そう言っただけ俺を家に上げる。

「コイツ……居候のくせになんと生意気な……」。

と思ったが言うとなんか面倒な事になりそうなので言わないでおく。

そして裁の部屋らしきところに行く。

長老の家は結構広い。木のナチュラル成分たっぷりの良い匂いが鼻腔をくすぐる。やっぱりいいねえ木造建築って。

「それで話とはなんだ?」

俺が地面に座って、裁は椅子に座るといふなんとなく身分の差を表したかのような構図だが言うのが面倒なので言わない。

「俺こと頂ちゃんは……旅に出る!」

俺はそう言いズビシツと人指し指を裁に向ける。ついでに爽やかな笑顔も忘れない。キマった。だが裁は

「そうか」

と、淡々と言う。

なんだよ、俺の気迫に圧されて「お、おう」とか言ったりしろよ!

「なんかリアクションは無いのか!」

「?リアクションとはなんだ?」

「うっ……!!」

しかもホントにわからなさそうだ。そういえばココ古代中国っ！
裁とぎゃーすかぎゃーすか言い合ってから、話を戻す。

「で、俺は旅に出る」

「そうか」

先ほどと同じように淡々と返す。

だが俺はそれに突っかったりしない。つつかかったら先ほどと同じようになる。紳士だ、俺はっ！

「ここで裁に提案する。」

「お供として俺に付いてこないか？」

「……それは俺に旅に出ると？」

そう聞いてくるので頷く。

裁はちよつと考えるそぶりを見せて、椅子から立ち上がる。

「長老に聞いてくる」

というので俺は行ってら〜という言葉を部屋から出ていく裁の背中に投げかける。

数分後。

「旅に出ているとの事だ」

部屋に戻ってきた裁はそう言う。

それに適当な相槌を打ってから、裁に聞く。

「じゃあ、裁は俺についてくる？」

「当たり前だ。命の恩人に報いたいからな」

……友情だね〜。いやこれは友情とは何かが違う気がするけど

……まあいいや。

裁と適当な雑談を交わして、日もいつの間にか暮れてきたのでそろそろ家に帰るとする。

長老に一言言ってから、裁とも別れ、家路につく。

ひとまず旅のお供ゲット！あ〜旅が楽しみだあ〜、と心の中はルン

ルン気分の頂征であった。

〓 裁視点 〓

コウリと別れた後、部屋に座り机の上にあった書物を読む。

俺は感謝していた。

騒がしくも一緒に居て飽きない命の恩人、コウリが俺に旅のお供になつてくれと言ってきたのだ。

正直ありがたいと思った。

それは暗に俺という存在がコウリの中では認められているという事なのだから。

死にかけたあの日。その時の事は俺も記憶が曖昧で体が極限状態だったので覚えていないが、助けてくれたのは感謝している。むしろ感謝してもしきれないくらいだ。

だから俺は運が良いのだろう。

本当はあそこで死ぬ運命だったのだろうか、命を救われ。そして救ってくれた人に恩を返せる事が出来る。

これがどんなに幸せな事か。

盗賊に俺の居た村を焼かれ、そして盗賊に追われた。両親も死んでしまったかもしれない。

それは確かに不幸だ。

だがこれから歩む人生、辛い事はあれど幸せな事が待っていそうだと思うせる。

俺を産んでくれた親が俺を誇ってくれるように。

この命を救ってくれた友に。

俺は進むのみだ。

俺はそう決意をし、既に読み終わった書物をパタンと小気味良い音をたてて閉じた。

〓 裁視点 〓

7わ

「なあ裁よ」

「どうした？あとその変な喋り方をやめろ」

「俺……鳥になりたい」

「……いきなりなんなんだ」

「だってよお！鳥を見ていると、こつ……なんていうか……フライア
ウエイ……っていつか……」

「ふらいあうえいとは何かは知らんが、言いたいことは分かった」

「だろ!?!」

「だがこんな時に考えることではないぞ」

「へいへい」

そう俺は今、旅の途中である！

っていつのは嘘だ。出発するのは2日後だからな！

けけけ、引つかかった奴は誰だー？

……一人もいねえじゃんかよ……。

「ん、どうした？いきなり変に落ち込んで？」

「いや、なんでもないー！」

ちよっと心の中でボケかまして聞いている人がいなくて俺って友達
少ないんかなー、世も末だ……って考えてたなんて絶対言えねえ！

「そんな事を考えてたのか」

「ぴぎっ!?!なんでまたっ!!」

「途中から声に出ってたぞ」

俺は、気づいてしまった……俺の心は誰にも見られてない、自分で
自分の心を見せびらかしていたこと……!

あー、もうどうすればいいんだ……くそぞう。

「もうすぐ着くぞ。だからそんな悲しみに打ちひしがれたように手を
頭の上ですすり合わせるな」

今、裁と向かっているのは隣の村だ。俺たちの村と物物交換とか賊の討伐みたいなので結構仲がいい村。

年に2回、長老さんとかが隣村に行き様子見をしてそこで色々と物価とかを決めるらしい。長老さん意外と仕事をしているものだなあ。しかもかれこれ何百年も前から続いているシステムなのだからすごい。村間の食料の奪い合いを止めるためどっちも食料を均等に分けなさい！と誰かから言われたらしく、それでこの助け合いシステムがある。

うむ、先達には感謝だな。

しばらく裁とやいのやいのしてるうちに村が見えた。

隣村はそこそこ発展していて、人が多い。村というか町だ。

だから見ればすぐにそれだとわかる。

隠れるものがない平原にある、一見守りの薄そうな木の防壁。

でもこの下には石で作られたもう一つの真の壁がある。何百年も盗賊から身を守れたのはひとえにこのハッタリのおかげだろう。

しかも盗賊が襲ってきたら早馬でこっちの村に救援要請される。

そして隣村が盗賊の攻撃をしのいでる内に部隊を編成、盗賊の背後から寄り隣村の方からも兵を出して挟み撃ちって感じた。

この流れは相当前からやられてきたもの。結構村、いや町か……町にしては中々の防御力を発揮する。

……ん？俺の村は？いやいや……それについてはノーコメントで。俺が心の中で誰にもなく説明しているといつのまにか村の門に到着。

こじんまりとした、だが幾度となく盗賊の攻撃をしのいだ風格のある門に向かって声を張り上げる。

「隣村からきましたー!!」

俺が叫ぶと門が開いた。

中から警護している兵2人が出てきた。

どちらも顔馴染みだから面倒な個人確認とかはいらなそうだ。

安物の槍を携え歩いてくる2人はどこことなく下っ端そうだ。だがそれは表面上のもの。隙の見られない物腰なのを見ればすぐに相当な実力者とわかるだろう。

「ってかこの村まじでフェイク率高えなおい。まあそうでもしなけりゃ盗賊から村を守れないからなんだらうけど。」

「よう、今日はどうした？」

二人のうちの一人が俺に聞いてくる。

昔からお互い顔を知っているので比較的フランクに接してくれる。警戒心MAXの警備兵よりはマシだ。というかありがたい。

「報告に来たぜー」

「ん？報告？なんだ、お前に報告するほどのものがあんのか？」

俺はそれにカチンときたが、「俺は紳士、まじでかっこいい紳士、あの程度のヤツにキレルなんて紳士じゃない」と心の中で唱えながら我慢した。

「取り敢えず中に入れてくれ」

「ああ、そういえばそうだったな」

ガツハツハ、と豪快な笑いをあげながら俺たちを先導する。

裁は空気になっていている感じがしないでもないが、慣れてそうなので放っておく。

「それで、そのツレは誰だ？お前を信用して聞き取りを無しにしたが、ちゃんと信頼出来る男だらうなあ？」

先導していかないほうの警備兵がそう言う。

良かったな、裁。話を振ってもらえて。

「そりゃあそうだろ。裁、自己紹介」

「ああ。俺は性は豊（ホウ）、名が江（コウ）、字が土尾（シビ）という者だ。よろしく頼む」

裁はそう言って頭を下げる。O・J・I・G Iだ!!

「おー、こいつより礼儀いいじゃねえか。俺からもよろしく頼む」

「なんだよコイツよりって！俺だって礼儀良かったじゃん！」

「初対面で、っつんこさせてくれ！つかさせる！」って言ってそれで礼儀が良いなんて言う馬鹿いるか」

うぐう……そこを突かれるとは……。

俺がしばしその言葉に悲壮感を漂わせていると、先導していた兵が立ち止まる。

「あそこに長老はいる。俺たちはもつそろそろ警備に戻らにゃならんから、送れるのはここまでだ」

先導していた兵が指差すのは、俺の村の家より規模が倍違う家の中でも、一際目立つ家だった。

「じゃ、帰るときにまた会おうぜ」

俺を礼儀のない小僧と言ったもう一人の兵は俺の肩にポンと手を載せてそう言う。

俺はそれを方を揺らして振り払う。だがその姿が可笑しかったのか兵は笑いながら、来た道を戻っていった。

くそう……笑いやがって……。

でも警備兵が笑っていられるのはひとえに平和だからだろう。うん、良い事ではあるがなんか複雑な気分。

さて長老さんに会いに行きますか、と裁を連れて歩き始める項征だった。

「あ、そだ。裁ー、お前挨拶して」

「なんでだ？お前のほうが顔は知られているだろう？」

「緊張するー、あーやだ緊張するー」

「棒読みでこちらに期待の目を向けながら言うな。俺はしないぞ」

「ちえっ、裁のけちんぼ」

「言っている」

俺は今隣村長老の家にいる。

そして長老の家の椅子で二人仲良く座っている。

これは他に大きい椅子が無いそう。そして別々で座れよって思うが、他の椅子は座った瞬間に足が折れる。

もしかして俺太った!?と思ったが裁のほうでも同じ現象が起きたので安心した。

そして唯一、生き残った椅子は今裁と一緒に座っているこの椅子だ。

この椅子はそれなりに大きいものの本来は一人用の椅子だ。

育ち盛りの青年二人が座るには少々きつい。

「ちよっ、狭い」「我慢しろ。俺も狭いと感じているのだからしょうがないだろ」「くっそ、ためー男のくせにケツでけえんだよ」「なっ!?それを言うならコウリもだろっ!」「何をー!」「言い合ってしまうのも仕方がない。」

そして長老がやってきた。

「久しぶりじゃの、コウリよ」

「はい、久しぶりです。長老」

出てきたのは白いヒゲをのびし、開いているかいないかの微妙なラ

インの目を温和そうに曲げているお爺さん……じゃなくて黒いヒゲをちよつとだけ生やして、キリリと吊り上がった目でこちらを威嚇するような視線を投げる見た目40代の男性がいた。

ちなみに今年でおんとし86歳だ。おかしい。これは何かがおかしい。お爺さんのほうは長老の執事である。こっちのほうは長老っばいだろう！でも年は72歳。長老見た目年齢若すぎねえ!?

最初見たときは長老とはしらずにフランクに接してしまった。そりゃあそうだろ。見た目40代が俺に古風な口調で喋りかけてくるんだから俺もふざけて古風で喋っちゃうのはしょうがないじゃん！でも幸か不幸か、気に入られてしまった。“長老相手にその態度で接せるとはな！気に入ったぞ、ボウズ！”である。

「そんな取ってつけたような口調はよい。いつも通り話せ」

長老はこう言ってくれるが威圧感がパネエので言うとおりにできようはずもない。後ろの裁も俺が長老の正体を知った時と同じ顔をしていた。そりゃあ、驚くわなあ……だって俺も驚いたもん。

「ん、分かった」

俺は口調を治すと、長老は満足そうに頬を緩めた。もっとも戦闘狂がにやりと怖い笑みを浮かべているようにしか見えないが。

「そちらはっ」

「長老が裁に視線を移す。

「俺の友達。裁、さくつと自己紹介、」

「あ、ああ。どうも、お初にお目にかかります、豊 土尾と申すものです」

「そう言っって頭をさげる、裁。

……やっぱこいつ礼儀正しいなあい。なんか頂ちゃん悲しくなってきた。

「ふむ……礼儀正しいのお、斬華とは違って」

「だって！それは長老だと知らなかったから！」

「だが他人に礼儀を払うのは当然であろう？私にだけ礼儀を払ってものお」

「うぐっ」

「長老……」の言葉、晴らしてやる！

「それで話を戻すでしょう。豊 土尾と申したかの？ 私はこの村の長老をやっている琉 虎白（リュウウ コビヤク）という者だ」

「先ほど名を申し上げましたが、豊 土尾でございます」

俺はその様子を又ボーツと見ていた。

どっちも堅苦しいなあ、なんか見ててモヤモヤするー。

「それで斬華。何用で私の家に来たんじゃ？」

おっと、それをすっかり忘れてた。

俺はちよいと姿勢を正してから言った・

「俺は旅に出るー」

「ほう。頑張ってる」

俺の決意と覚悟が滲んだ言葉を長老は淡々と当たり前のように返してきた。

なんでよ！みんななんで俺が旅に出るって言うのに冷たいんだっ

!!

俺が現実の無情さに文句を言っているよ。

「私も煌龍のお供としてついていきます」

「ふむ……そうか。君は中々に優秀そうだ。この世界を見ているいと学んでいくが良い」

それだよ！俺はそういうのが欲しかったのに!!

そして長老といるいろな雑談をしていましたとぞ。

なんかもう主人公なのに空気って……、という理由から省いた。と
いつか思い出したくない。

思い出したら思い出したで悲しくなってくる。

お、あそこにカエルが……。

「それで「ウ」」

「んあ？」

ふと裁に呼ばれたので、すぐさま現実逃避をやめる。

今俺たちは長老の家を出て、長老の家まで送ってくれた顔馴染みの警備兵の冷やかしを通り過ぎて俺の村に行く途中だ。

「旅の行程はもう決めてあるのか？」

旅の行程……ふむ。

「決めてない！」

「なんでだ!？」

「だって……旅はやっぱ行き当たりばつたりのほうが面白いし」

旅の醍醐味は何が起こるか分からないというところだろう！既に決められたルートに行くのは遠足と変わらないじゃないか！

「だが……それだと困る事もあるんじゃないか？」

「それが旅の良いところじゃないか！それに困る事で世界を学べるだろ!？」

「……まあ、それもそうか」

と言って納得したように頷く裁。

「だが資金はどうする？」

「人から貰う」

「馬鹿か！」

今日も平和に鳥が空を飛んでいた。

「今日はお祭りだあっ！」

「その前に服替えろ！」

「だあーもううっさいなあ、裁！いいだろそんなくらい！」

「汚すぎるんだ、お前の今の服装は！」

「それ言っな、あほー！ー！」

「だっいたら着替えろ！」

今日は宴の日。

俺と裁は、村の近くの川原に来ている。

お母さんに「準備の邪魔だから裁君と一緒にどこかに行っとなさい」と言われたので来たのである。

小さな川で、めっちゃ水が綺麗な川だ。

空気も澄んでるし、誰もいないからイイね！

「……なんか実験したくなるなあ」

「ん？実験？」

「うん。必殺技の」

「やめろ！お前の技はシャレにならん!!」

あ、裁め。どこでそんなシャレなんて言葉を知った。

とつか酷いよ、その言い方!!つか必殺技なんだから凄いに決まってるだろ！

「必殺技にはロマンがある」

「は？」

いきなり語りだした俺に、裁は頭上にハテナを浮かべたような顔になる。

「必殺技とは、強く！そして華々しくあるものだ！」

「ふむ」

「だから、俺はここで必殺技を開発する！」

ドドンと胸を張って言う。俺の背後には見事な後光が差しているのだからな……。

「そうか……って待てー！」

「あ？なに？」

早速作業しようとしてたら、納得しかけてた裁に呼び止められた。

「……単にここで暴れたいだけなんじゃないのか？」

「(ギックウー)」

……凶星ついてきやがった。しかも俺がギクツってなっただとこで裁の周りの温度が心なしか下がり、俺を見る目がだんだん氷点下を下回りそうなの……。

だが、俺も負けない！なんたって俺は勇者だから！

「いいや！俺が編み出した必殺技は暴れてるように見えて、実は暴れてないのだー！」

「……」

相変わらず冷たい視線だが、まあ何も言わなくなった。これは裁の「エンゾウ」自由……」って……無言の合図。

……ま、まあいいんじゃないかな？やっちゃって……うん。やっちゃって……いい、のかな??
よしー！

ズゴオオオオオツ
!!!!!!!

「……………」

先ほどは綺麗に澄んだ水が流れていた周りを木が覆う小川が、なんという事でしょう。今では水が流れていない地表を黒々と染めた荒地に変貌させました。

裁と俺は見事に絶句である。

俺がやったのは拳での突き。

気を体の各所に纏わせ、体全体を使い捻り、それによって生まれた力を拳に全て集約し、更に超高密度の気を纏わせた一撃。

実験なので比較的纏わせる気を半分程度に抑えた。

俺の予想では、真空波みたいなのがでて遠距離に使えるっていう程度でしか考えていなかった。

だが結果はどうだ。

水も蒸発し、大地を黒くする様子からはとてつもない火力が伺える。生身の人間がいれば灰になるだろう。

だが問題はそこではない。いや、一応これも問題ではあるのだがそれを上回る問題がある。

先ほど見られなかった壕のような穴を辿っていくと、数百メートル先にある崖みたいなのが俺のこぶしの形に入こんでいる。

一体どんな理屈でそうなった。あれか、空気のアレか。

放つ瞬間に波動のようなものが飛んでいったのが見えたからそうなのだろうけど。

「(我ながら恐ろしい技。本気でやったらどうなるんだろ)」
ところで裁が何も言わないので振り返って見てみる。

「……………」
硬直ですか……………分かります。ものすごい音と光がして、煙が晴れたと思うところのような光景がうつってるんですもん。

でも、困るなあ裁がこのままだと。

裁のところへ歩み寄り、裁の目の前で手をヒラヒラ。

「……………」

変わり無し。

ふむ……………頬をつついてみたらどうだろう？

ツンツン

「……………」

反応無し。生きてんのかね？

よし、じゃあ殴りますか。

そう思い握りこぶしを作ると。

「……………」

……………気がついたっばい。

「わ、わっきのほ……そっ……わは……わっきのなんだ!?!」

同じ質問を2回してるよ、裁ー。

そして裁は俺の腰辺りで待機している握り拳を見ると、さっきの俺の技を思い出したのか素早くその場に伏せた。すげえ……はええ。

「やめろーやめてくれーぎゃああああー！」

「落ち着け裁ー！」

「落ち着いていられるかーなんださっきのは！というか何故握り拳をしゅっているの？」

「だからおちつけーさっきのは必殺技！握り拳はなんとなく！」

律儀にすべての問にほんの少しの嘘を混ぜ込んでからスラスラと答える俺。

「はあ……落ち着くのはもうちょい先になりそう……。」

「そうか」

裁が落ち着いたところで話をした。

さっきの技を詳しく説明。「応名前を「絶拳(ゼツケン)」にしいた。理由はなんとなくである。

話を聞いた裁は俺の技に驚くが「まあコウリだからしょうがないか」とか言って納得した様子。ざげんなアホウ。

取り敢えずこの技は封印。半分の力でこの被害なら本気でやったら……ひゃあ、恐い。

まあ実戦などではタメの時間が長いので使うことも無いだろうけど。

「で、どつするの？こね……」

「コウリのせいだろう」

つぎの問題はこの黒ずんだ大地である。他の人からみたら災害にしか見えないよねえ……。

「だって……。あっ、止めなかった裁も悪いからな！」

「そうやって他の人にも罪を擦り付ける俺。」

「なんだと!?止めただろう！」

「へーへー」

「コウリ……」

「ひひゃっっっ」

裁がこめかみに青筋を立てて震えている。
あまりの迫力に俺は情けない悲鳴を漏らす。
なんだろう……俺、ダサい……。

しばらくして土を運んで黒くなったところを誤魔化す作業をしているコウリと、それをサボろうとしたら叱咤する裁の姿があった。

「おい、コウリ。もうみんな集まっているぞ」

「もうちょっと待ってて！あと少し……」

「何をしているんだ？」

「カエルが卵産んでるんだよ！もうすぐ終わりそうだから待ってる」

「……皆を待たせておいてよく蛙の産卵を見ていられるな」

「だってよお！マジで卵がブリブリって出てくるんだぜ！これもう見るしかないじゃん！」

「……はあ」

「これから宴。

「何をグズグズしている！早く来い、コウリ！」「なんだよ、蛙の産卵見て悪いか！」「皆を待たせている時点で悪い！時と場合を考えろ！」

俺は今自分の家に爆走中だ。いや、裁の事も考えているから、早歩き程度？取り敢えず走ってるように見えるけども裁のスピードにあわせる為に早歩き程度の速度である。

あの後、カエルの産卵を見届け、いざ行こうとしたら既に日が傾いていた。

やばい、裁はもうしびれを切らしてもう行ったか！と思ったが、後ろに裁がいた。

「え、先に行つてなかったの!」「宴の主演は俺たちだろう？ならばコウリと行かねばならんだろ」とかつこい発言をかました。

その時はおお……さすが俺の友達だっ！なんて思っていたが後々考えるとくそう……あの発言は俺が言うべきだろ……と後悔した。

全く……呆れて物も言えんよ、裁よ。

待たせた相手に言えるような言葉ではない事を頭の中でのろいろと浮かべながら走る。

さて、俺の家はもうすぐだっ！

家の前についた。

既に宴は始まっていろいろんな人の声が聞こえる。怒声やら怒声やら火星やら……最後の違う、歌声だった。いやでもこれ訓読みつつかそんなかんじにすると、「かせい」って読めるよね。漢字って不思議。

……なんか猛烈な悪寒がする。なにこれ、なんか怖いんですが。一応裁の後ろに隠れておく。

「何をしているんだ？ここは家の主が開けるものだろう？」
「だが前に突き飛ばされた。」

変に真面目だよ、コイツ！しかも今日に限って憎い！あいつ心の中では絶対笑ってやがる！

……しょうがねえ。ここは俺が折れてやる。感謝しろ裁。

などと強がった事を思いながらも、悪寒が拭えないコウリ。

だがあえて悪寒を無視して扉に手をかける。

ぶわっ！

「はぎゃっ！」

なんか変な威圧感に変わった！ぶわって来たよ、ぶわって!?

後ろでは裁が何をしているんだ、早く開けると言わんばかりの無表情でこちらを見ている。

あゝもう分かったよ！行きゃいいんだろ行きゃ！

扉をあける。

そして何かが飛来してきた。ん？あれは……人型？なんか、見覚えが

「コウリ……」

「おぐあっ……」

ドンガラガツシャーン！

何かが俺の腹に激突。というか女の子が激突。ちよつと腹がへこんだよ、おいしい。

「おーおー、今日もいい夫婦っぷり見せてくれるじゃねえかコウリ！
がはは
「

「俺にも分ける……」

「うるせエー！ってか夫婦じゃねエ！！つか分けるってなんだよ！飯にもお前こいつの父親だろうが！！」

がははと笑うおじさん達。「このやるじ……。」

「ウリー」

「なんですかー！」

ヤケクソ気味に応えると嬉しそうな顔をする少女……というか俺と同年代だが年下にしか思えない言動をする女の子。

ちなみにこの子は名が逢（ホウ）、性が董（トウ）、字が季華（キカ）。真名は芽衣（メイ）。

灰色の髪が肩まであり、はっきり筋の通った顔は可愛いというより綺麗。平均より高めでスラリとしたそれでいてボンキュッボンな体型はほんわりとした雰囲気とあいまってすごく魅力的である。

「構ってっ」

上目遣いをしてそんなお願いをする芽衣は可愛い。うむ、可愛い。もはや、可愛い。

そしてお願いされたら断れない俺！

「いっせー」

声高くそう言えば芽衣は喜んだ。俺の腹に頭を擦り付けるので、なんとなく撫でたくなっただので撫でなで。

「ふぁ~~~~~」

気持ちよさそうに顔を緩ませ、気の抜けた声をあげる芽衣。

……やっべ、かわええ！

おじさんAから貰った皿片手に芽衣の頭をナデナデ。というかなんでこんなに髪がサラサラなのだろうか。

ん~~~~~まあいいか。

「やっぱ夫婦だな」

「はぁ……夫婦とか言っつな」

そう言ってきたのは裁。……ってか裁いたのか！何気なく返答してしまっただけども！

「先程から居たが？」

「……なんかごめん」

寂しそうな声色をしてそう言う裁には、謝罪の言葉しか出なかった。すまんよ、裁っ…！

いろいろな人と話したり、宴の席にあった料理をお腹いっぱい食べたり、芽衣をナデナデしたりと、いろいろ楽しめたところで何かイベントが始まるような雰囲気になった。

「んー？」「ウリ、どうしたの？」

「なんか始まるみたい」

そう言ってくる芽衣に無難な言葉を言い撫で撫でして黙らせる。ってかマジ可愛いつす。

宴の中央ではお母さんが何か言ってる。ちょっと遠いので芽衣を連れて近づいてみる。

「この村を旅立つ」「ウリと裁君に贈り物でーす!!」

そう叫ぶ母さん。贈り物？

芽衣にはそこらへんで料理食ってなと言ってどこかへ行かせる。

裁も俺の母さんの言った事に疑問符を浮かべながら寄ってくる。

「贈り物って？」

「分かん。これから渡されるよっだな」

裁もやっぱり分からない様子。

「さてこの宴の主人公に登場してもらいましょうー！」「ウリーー！裁君」

お母さんに呼ばれたので裁と共に中央へと向かう。

なにが贈られるんだろ？